2021年度　横浜商科大学研究助成金　研究成果の概要

研 究 課 題 名　　**Flat Stanley Projectを活用した英語による自己表現と異文化交流**
研 究 代 表 者　　**商学科准教授　　東本　裕子**

本研究の目的は、コロナ禍で実際の移動を伴う海外との交流や留学が困難な状況の中で、異文化理解と国際コミュニケーション促進プロジェクトとして評価の高いFlat Stanley Projectを活用しCOIL(Collaborative Online International Learning) として学生へ異文化に触れる機会を提供するものであった。

日本側の参加学生は、異文化理解と英語コミュニケーションを扱うゼミの学生と、留学準備講座の学生であり、海外への関心が高く、短期海外研修や長期留学への希望を持っていたもののコロナで断念した学生も少なくなかったため、代替案として現状で可能な異文化交流を模索した。

Flat Stanley Projectは、アメリカ人作家 Jeff Brownの絵本 Flat Stanleyをもとに、カナダ人の教員Dale Hubertが1995年に開始した教育プログラムである。参加者は各自が作成した Stanleyの紙人形を自分の分身として海外の交流相手へ送り、様々な文化体験や交流を通して、異文化に対する関心や理解を高める内容のプログラムとなっている。

今回の研究においては、通常のFlat Stanley Projectと異なり独自のスタイルを二つの点において取り入れた。一つ目は、文化体験や交流を一方向ではなく双方向とし、参加学生が自身のStanleyを相手国へ送り異文化を体験するだけではなく、交流相手のStanleyをホストファミリーとして受け入れることにより、異文化のみならず自文化に関しても理解を進め、相手に英語で紹介する作業を通して英語による自己発信と自発的なコミュニケーションへの動機づけへ繋げようと試みた点である。二つ目は、交流の手段として通常の郵便による交流と並行し、Eメールやオンラインツールzoomを使用した同期型交流も取り入れ、学生が実際に自身のStanley人形の現地での様子やホームステイ先となった相手の学生の顔を見ながら交流を深めた点である。また、本研究の最終的な目標として、自身の分身アバターであるStanley人形を用いたL2 selfとしての自己表現により、英語発話を学生の自己肯定感の向上に繋げることを試みた。

交流相手としては、海外の大学で日本語や日本文化を学び、英語力も高い学生を対象とし、今回の実践においてはアメリカのピッツバーグ大学ブラッドフォード校、韓国の建国大学、極東大学、中国の河北工業大学、台湾の致理科技大学の4カ国5大学の学生と非同期型、同期型交流を実施した。日本語や日本文化を学ぶ学生を対象とした理由としては、実際の対面を伴わないオンラインの同期型交流において、出来るだけ双方に負担が無いように学習言語を相互に理解し得る相手としたことと、交流においてより相手の文化に関心を深めやすいことが挙げられる。

通常のFlat Stanley Projectでは、自身の分身としてオリジナルの絵本にもとづくテンプレートに沿ってStanley人形を作成して交流相手に送り、Stanleyが自分の代わりに異文化体験をして来るという流れが多く、今回も韓国の大学以外はそのスタイルを踏襲した。韓国の大学は、時差が無く双方のスケジュールが調整し易かったことにより複数回の同期型交流が実現可能だったことと、郵便事情が思わしく人形が行方不明になる可能性が否めなかったことにより、プロジェクト開始前にzoomで交流相手と面談を行い、相手の学生のイメージをもとに受け入れ学生が相手のStanley人形を作成する、というスタイルを試みた。このことにより、交流相手のことをより理解しようとする意識が初回のオンライン交流から働いた。韓国との交流においては、複数回の同期型交流を活用してバーチャル・ホームステイプログラムを計画し、相手のイメージで作ったStanley人形が実際に3泊4日自宅へホームステイをしたという仮定でホストファミリーとしての滞在ジャーナルを相互に作成した点が特徴となった。日本側の学生は、韓国の学生をイメージした民族衣装のチマチョゴリをStanleyに着せたり、zoom交流時に聞き出した服装の好みや髪型を人形作りに反映したりした学生も多くいた。韓国側の学生も、本来一つ作成する相手のStanley人形を、気分によって使い分けられるよう二つ作成し、「〇〇気分でお洒落な場所を観光しに行く大人モードの△△さん」、「△△気分で下町のB級韓国グルメを満喫する△△さん」のように、様々な角度からホームステイを楽しめるよう工夫した学生も見られた。ホームステイ開始前に、滞在中の行動や食生活に関する希望を予めヒアリングをし、初回の同期型交流においてリクエストの背景にある思い等の調査も相互に行ったため、ホームステイ後の滞在内容発表会における学生同士の期待度や満足度も高く、非常に想い出深い交流となった。

ピッツバーグ大学との交流においては、従来の形式に沿い双方の学生が自身でStanley人形を作成し郵便で送り合ったが、他大学と大きく異なる特徴が見受けられた。今回交流を行ったアジア諸国の学生は、事前に共有したStanleyのテンプレートに沿って人形を作成し、髪型や服装などで個性や民族性を表現した学生が多かったことに対し、アメリカ人の学生は、人形のテンプレートは使用せず、サイズもデザインも全く自由に作成

していたことが印象的であった。通常のStanleyが身長15センチほどで、様々な所に同行し記念写真も撮り易い大きさであるのに対し、アメリカから届いたStanley人形は60センチを超える身長のものもあり、日本側の学生はアメリカから到着した封筒を開き人形を迎え入れた時点から、アメリカの自由な精神を感じる！と感動していた。ホストファミリーとして大型の人形を受け入れた学生は、観光名所などでの写真撮影時に周囲の人から注目を浴び恥ずかしかった半面、サイズが大きいことによる仲間意識も人形との間に不思議と芽生え、楽しい交流となったようであった。また、ピッツバーグ大学との交流においては、韓国のケースとは異なり、交流相手の学生とオンラインで会う前に人形が届いたため、どのような学生がこの人形を作成したのか、という楽しみが同期型交流における活発なコミュニケーションへの意欲へ繋がったことは良い点であった。

各大学の学生との同期型交流においては、zoomのブレイクアウトルームの機能も活用し、全体での相互の文化紹介やFlat Stanleyを活用した交流と合わせ、事前に準備したトピックに関する個別あるいはグループ毎のディスカッションも行った。交流実施前に双方の学生や教員で検討し、コロナ禍の大学生活や学業における工夫、将来の計画、季節のイベント、食生活等について少人数でディスカッションを行った。

本研究において、各国の同年代の学生との交流により日本側の学生が新たな視点で自文化の魅力を発見し紹介しようという気持ちと共に、交流相手の文化に対する深い関心と共感が芽生えたことが喜ばしい結果であった。また、英語による自己表現とアバターとしてのStanley人形を通したL2 selfとしての自己開示に楽しさと達成感を実感すると同時に、諸外国の学生の外国語習得のレベルの高さを目の当たりにし、意欲的に英語学習へ取り組む学生が増えたことも大きな収穫であった。さらに、コロナ収束後に相互に訪問し合い、実際の対面交流を実現させたいという全ゼミ生共通の目標が出来たことも、全体としての学習意欲向上として有難い結果であった。